



## インドにおける救ライ事業

戸田 圓二郎

私は昨年11月より本年2月にいたる3ヶ月間、東南アジア研究センターのライ研究班として、西占教授とともにタイ、マレーシアに行っておりました。学外協力者として参加する機会を与えられましたことを深く感謝いたしております。その後、7月27日羽田を出発いたし、目下インド U. P 州アグラ市にあり、財団法人アジア救ライ協会の一員として救ライ事業に従事いたしております。

昨年のタイ、マレーシアにおける研究調査による知見と、現在のインドにおける経験より感じました所感を御連絡もうしあげます。

ライ病というものは、1873年 Amauer Hansen によって発見されたところの Mycobacterium Leprae に起因して伝染するところの疾病であります。現在世界にどの程度患者があるかともうしますと、現在私が滞在しているインドに約300万、東南アジアに約150万その他約50万とみて、アジア全体として約500万と考えられています。

アフリカに50~60万、南アメリカに10万、欧州（主

としてスペイン、ポルトガル）に1万数千といわれており、世界中には約600万を越える患者があるわけです。歴史的に見れば、紀元前よりライ病は存在していたようであり、エジプトより中近東を通り、欧州に広がったライ病は、中世紀頃には欧州全土にまん延したようであります。しかし、強制隔離政策によって15世紀頃より減少し、現在の欧州では南欧に1万数千を算するのみであり、北欧においては皆無に近い状態になったのであります。

我が国においても、古くよりライ病はあったのであります。明治時代に20万程あった患者も療養所に隔離治療することによって、現在では1万足らずに減少いたしました。かくのごとく、先進国においてはライ病はなくなりつつあるのですが、まだアジア諸国には約500万の患者がいるのであります。その中でも特にインドには、約300万以上の患者を算するような現状であります。

何故に、インド、東南アジア、アフリカに患者が多いかともうしますと、勿論、これらの国々の経済、衛生等一般社会の後進性に深く起因していることは明白であります。先進国においては、宇宙開発等に莫大な経費を投入している時代であります。後進国においては前世紀よりあるこのような疾病が、いまだに根絶させることもできずまん延しているような現状であります。

インドの一般社会の現状はどうかともうしますと、

ライ患者のみが貧しいのではなく、国民の何十パーセントというものが、半飢餓状態であるといわれております。家なきものも多く、街路にごろごろと寝ているような状態です。国民全体の生活程度の低いところがありますからライ患者が乞食をしているのも、患者でないものが街をうろついているのも同然であります。

インド政府としても、ライ病対策は重要政策の一つに入れておりますが、他にもやらねばならない内政問題が山積しているのであります。近年は特に経済状態は悪化し、その上食糧不足により国民生活の向上の見通しは暗いのであります。

外政問題としてもカシミールをめぐる印パ紛争、中印国境問題等があり、まさしく内憂外患の状態であります。この度起った印パ紛争の際、私はカルカッタにおりましたが、市内は臨戦体制をとり夜間は灯火管制によりインド全土が日没と共に暗闇になってしまうような状態でありました。このたびの紛争は明らかにインドが侵行を起したものであり、その目的はカシミールをめぐるパキスタンが侵略行動を起そうとしたので、その侵略を未然に防ぐためともしておりますが、果して真実はどうなのかわからないのであります。インドもパキスタン同様にその使用武器はともに外国よりの援助物資であり、いつまでも自力で戦争を続けることは不可能であり、あまり長く続けることはできないであろうと考えられておりました。幸にも短期間で一応停戦したようではありますが、いまだに毎日両軍の接触は続いているようであります。数日前にも私が滞在しているアグラ市の郊外が突然に爆撃され高射砲火が青空に散り、ついでサイレンが鳴りわたるような状態であります。昨年私がポパールよりデリーに帰る車中で国境守備隊長のインド陸軍大佐と同席した際、彼はインド人とパキスタン人は兄弟であり、何ら紛争する理由はなく、印パ紛争は一部政治家のために起されるところの問題であるといっておりました。また、内政問題がゆきづまると印パ紛争を起して、国民の目を内政より外交問題に移して責任のがれをするのだという言葉もよく聞かされるのです。もしこのようなことが事実であるとすればインドの発展は期待することができないでしょう。

このようなインドの現状において、ライ患者300万に対してどのような施策をもっているかと申しますと、経済力の貧困とあまりにも多い患者数に対しては

充分なる政策も施しがたいのであります。

ライ病は伝染病である以上隔離政策は当然でありましょうが、実際問題としてインドにおいては不可能であります。この患者数も全人口を調査した数字ではなく、調査をすればするほど患者数は増加するようないであります。ライ対策としては、調査、治療と教育の3点に重点をおいております。各地方に Leprosy Control Centerを設立して、医師および Paramedical Worker が患者の調査および治療を行ない、衛生教育をし、患者の早期発見、早期治療ができるように努力いたしております。

何といても約300万という患者を治療するに對して、医療関係者が少なくて充分な医療ができないのであります。欧州からも多くの Mission がきて救ライ活動が行なわれております。

1943年以来、ライの化学療法剤として D. D. S. が使用されて、ライ病も治癒するという光明を見出したわけでありました。D. D. S. がライ治療に使用される以前は、ライ対策としてはやはり隔離政策が最善の方法でありましたでしょうけれど、化学療法剤のある今日においては、隔離政策よりも化学治療に重点がおかれるべきでありましょう。

ライ病には、ライ腫型 (Lepromatous Type) と結核様型 (Tuberculoid Type) の2型に大別されて考えられております。すなわち、前者は悪性でありほとんど細胞内でライ菌は増殖し、それ故に、他への伝染源にもなるものであります。後者はそれに反して良性であり、患者個体にもある程度の抵抗性があるために、患者個体の細胞のもつ防衛力でライ菌を処理することができるのであります。それ故に、後者の場合にはあまり他に伝染させるようなことは少ないのであります。日本ではライ腫型と結核様型の患者比が2:1であります。東南アジア、インドではまったく逆でありまして、その比が1:2であります。ライ病の多いインド東南アジアにおいて良性の型が多いということは非常に興味ある事実であります。ライ病が多いので、その地方に住む人間には自然に病原菌に対してある程度の抵抗力を獲得するものと考えられています。それ故に、発病しても良性の経過をとるのだと考えられております。また民族的な特異性であるかもしれません。

タイ、マレーシアでは現地人より支那人の患者が非常に多くあることに興味を覚えました。御承知のごと

く、タイ、マレーシアは支那人の多いところでありませんが、現地の人種別人口構成と人種別ライ患者を比較してみると、支那人のライ患者は現地人の十数倍の発病率を示しております。この事実は果して、生物学的な異民族による特異性でありましょうか。東南アジアの諸国に生活している支那人の多くは、数代以前より現地に移住して土着しているものであり、少なくとも第二次世界大戦以前から現地で生活をしているのであります。それ故に、現地の気候、風土による影響等は現地人種と同様であろうと考えられます。ライ病の感染、発病にかんして他にどのような差異があるかと検討してみますと、私は両者間の生活様式に大きな差異のあることを指摘したいのであります。支那人は大家族主義であり、土着民は単一家族の生活をしているのであります。もし大家族主義の生活様式の中にライ患者があれば、多くの人人が接触によって感染をうける機会が多いわけで、単一家族主義の土着民族より多くの人々が感染をうけることになることは明白であります。現地の医師の話では現地民は病気に対して不感症であり、支那人はそれに反して神経質だから治療をうけている患者は、支那人が多いような数字を示しているが、現地人の患者は未治療の状態であるのだと説明しておりました。果してそうでありましょうか。単に病気に対する自覚によってきたす結果とは思われません。あまりにも大きな差異に対して、私はやはり生活様式の差異による感染の機会の有無が影響していると考えらるべきであります。インドにおいても、インド人の生活様式は大家族主義であり、それ故に家族内感染が多く、患者が増加する一因であると考えております。

人種別発病率の差異を検討する場合には、単なる異人種の生物学的な差異と考えることなく、その生活様式とか、社会的な相違点も充分考慮する余地があると考えます。東南アジアのライ患者の実態があまり正確に調査されていないので、このような興味ある人種差による発病率の相違についても、すべて推測の意見にすぎないのであります。目下各国政府と共にWHOの専門家がライの実態を調査しておりますから、近き将来には多くの事実が判明することでしょう。

インドおよび東南アジアのようにライ患者の多いと

ころでは、他に伝染性を示すライ腫型を Control の対象にするのは当然でありましょう。タイ国で検査した成績では5年以上治療した患者はほとんど無菌状態でありました。この成績は日本における成績も同様でありまして、少なくとも5年以上治療を続けることが必要であるわけです。5年以上治療を続けることは患者も苦痛でありましょうが、治療する医師の方も根気のいる仕事であります。

現在私は、財団法人アジア救ライ協会 (Japan Leprosy Mission for Asia) の一員として在印中でありまして、アジア救ライ協会は1963年5月、インド中央政府およびU. P. 州政府との間に協定を結び、U. P. 州政府よりアグラ市タジ・ガンジの地に50エーカーの土地の提供を受けて、目下その地に、India Center of Japan Leprosy Mission for Asia を建設中でありまして、このセンターは、治療、研究、および医療従業者の訓練をおこなうところでありまして、タジ・ガンジの地ともうしますと、世界的に有名な大理石の建築物であるタジ・マハールのあるインドの景勝の地でありまして、このタジ・マハールより東1マイル余り離れた地点に2階建のセンターを建設中でありまして、明春完工の予定であります。このたび内地より輸送した巡回診療車も現地に到着いたしましたので、当地を中心に医療活動をはじめました。現在センターを建設している地の隣接地には1864年に建てられた Leprosy Hospital があります。もう100年も以前につくられた病院でありますので、まったく近代医学とは縁遠いものであります。この病院にも出向いて治療を行っておりますが、建設中のセンターが完工すれば、このライ病院も我々の方に移管されることになっております。センターの未完成にもかかわらず、毎日のごとくインド各地より患者が尋ねて来るような状況であり一日も早くセンターの完工が望まれます。

センターの研究部門では電子顕微鏡も備えて、ライ病の臨床面のみならず基礎的研究にも充分な研究ができるように計画をすすめております。

インドの地にて、センター建設工事をも監督しながら近き将来を期待して現状を御報告申し上げます。

センター完工の暁には、諸賢の御指導をお願い申し上げます。

# サンパトンから

渡部 忠世

## 1 稲の作柄と雨

今年の雨は異常におそく始まった。タイ北部のモチ稲地帯の稲作技術の調査が私の目的だが、限られた期間の中でなんとか移植期に間に合わせようとして、サンパトン (San Patong) についたのが7月13日。5月にしばらく降った雨がとだえたままであった。苗代がすっかり乾ききって苗が黄色く枯れかかっているのがめだった。

8月になると新聞も今年の雨季のおくれと、不作の心配を書き始めた。試験場にもまったく水がなかった。しかし、新聞が書き始めた頃から雨が降りだした。私には熱帯の雨季の経験ははじめてである。最初の頃は、こんなものかと思い、やがてこれはすごいと思いつ出した。いつの間にか水田を満した水が、道にあふれ町にもあふれ出していた。

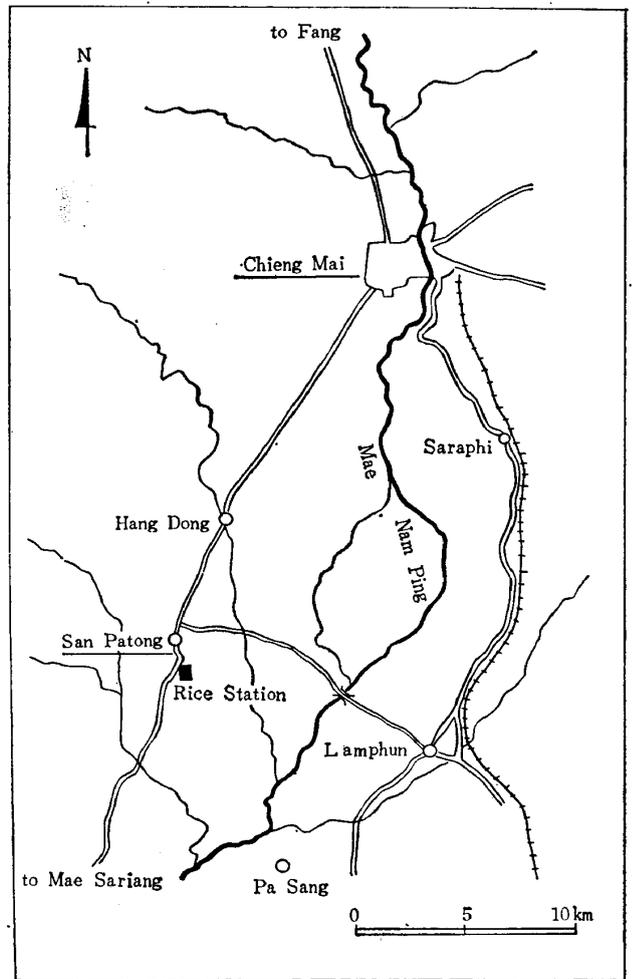
田植も急速にすすんでいった。一般に北タイでは田植は北にゆくほど早く、またピン (Ping), ワン (Wang), ヨム (Yom) などの河川の流域ほど早く始まる。サンパトンでは8月20日頃が田植の最盛期だった。この頃は連日大雨が降り続いた。色とりどりのビニールの布を肩にかけた農民が、家もまばらなのに、どこから出てきたかと思議に思われるほどに大勢で田植をしていた。

必然的に私の仕事も忙しくなり、外で雨にぬれることが多かった。しかし、雨のあいまに20分も日が照ると衣服が乾いてしまうほど、日射しはきつく、温度も高い。しかし同時に湿度も高く、温度較差も小さい。タイではもっともしのき易い地方というこのチェンマイ (Chiangmai) 盆地でも、やはり8月はかなり消耗する。

それでも雨量の絶体量は例年よりすくなかったらしく、政府の発表では中央平原で約40万rai (約6万4千ha) の水田が植付け不能だと報じ、またこの北部

でもナン (Nan), プレー (Prae), ランパン (Lampang) の諸県などでは結局植付けを放棄した水田がかなりある。9月中旬にプレーに旅行した時には、苗代期間4か月という稲にぶつかった。5月のはしりの雨で播いたままついに9月まで本田に水がこなかったのである。これはもちろん例外だが、私の見聞の範囲では一般にプレー辺りが北部では一番水に不自由していて、9月末まで田植が続いた。

10月1日付けの政府の発表は、一部に田植のできなかった水田もあるが、全般に作柄は良好と報じている。最近、ファン (Fang) やランパンへ旅行したが、たしかに立派な生育をしている稲が多い。バカ苗病の多発している水田もあるが、他にはこれといった病気もないし、まだ螟虫害もみうけられない。ファンへ同行していただいた植物病理学の赤井教授が「日本にはこんなきれいな水田はない」と感嘆しておられた。



そろそろ早場地帯では出穂し始めたが、これから倒伏や螟虫害でどんな収量になるか実のところ楽しみである。

昨年の米作 タイーはチェンマイ郊外のサラピー (Saraphi) の一農家があげた rai 当り1,200kg (反当りに換算して玄米約4石) である。最初は半信半疑だったが、これも何回も調査に出かけてみて本当だと思った。今年もいけるのではないかと考えている。試験場の技術者にいわせると、競技会に出品しなかった水田にもそれと同等あるいは以上と思われるものがあったという。

とにかく北タイの特にチェンマイ盆地の稲作にかんする限り、そう見くびったものではないというのが、現在の私の感慨である。水さえあれば、この地方の稲作はかなりの高収量を易易としてあげられるのではないだろうか。熱帯の稲すなわち低収量という既成概念は、ここでは通用しないような事例が多いのである。一方では水のない、あるいはかかりにくい水田の作柄はみじめであり、その差はきわめて明瞭である。

水のあるなしが、作柄の良否に基本的に関与していることをあらためて確かめられた。その他のすべての条件にこれは優先する。灌漑条件がタイではよく整っているはずの北部でさえもこのありさまである。今年の雨がさらに遅れ、あるいはさらにすくなかったら、私はまた別の感慨をもったであろう。

日本の今年の稲の作柄は、低温や台風の影響で一喜一憂しているとききおよぶが、北タイにかんする限りでは、かなりの豊作年であることは多分間違いないであろう。私の調査がこういう年にぶつかったことは幸か不幸か別な考え方もあろうが、一つの可能性を確かめうるチャンスではある。私はよい年に来たかと思っている。とともに、北部タイを選んだことも、いろいろな意味で好運であったろう。

## 2 サンパトンの町

私のいるサンパトンでも、直接にピン川から水のひける水田はごく僅かである。大部分の水田が水に苦勞した。メーターン (Mae Tang) のダムからの canal が2年後にサンパトンを通るといいうが、それまでは今年と同じように空をあおいで雨を待つしかない。

チェンマイから南へ23 km。メー・サリエン (Mae Sariang) へ通ずる街道沿いの典型的水田地



写真 1 Pa Sangへの渡し

帯である。ピン川にかかる橋を渡ってランプーン (Lam phun) へ、また渡し船でパー・サン (Pa Sang) にも通じる (写真1)。ちょっとした買い物は自転車でランプーンへ出かけることが多いが、高校生もランプーンとチェンマイの両方に通学する者が多く、文化圏としては上の二つの都市にそれぞれ影響を受けているといえよう。

郡全体の水田面積は約1万haで、その他に若干の果樹園 (竜眼が主体) と、豆やタバコを主とした畑作物の栽培がある。水稻の二期作は皆無。川沿いでわずかに二毛作がおこなわれる。いわばモチ稲単作地帯として類型化される代表的な北タイ農村の一つである。

郡役場を中心にして小さな町がある。サンパトンにかぎらないが、タイのこうした小さな町の景観を特徴づけて述べることはむずかしい。どこでもほとんど同じだからである。国旗のたっている役場と学校と郵便局の建物は、何か理由があるのだろうか、どこでも同じ建て方だし、道をはさんで、中国人とインド人の店が50軒ばかり並んでいるのでさえ、売っている品物まで大同小異である。それから数多くの寺であるが、サンパトンには山緒のあるような寺はない。寺の他にキ

リスト教の教会が一つ。中国人とインドを準タイ人とすると、この教会のドイツ人の家族と私だけが、今日サンパトンにおける異邦人である。こんな平凡なサンパトンで他の町にないものが私の6か月間滞在する稲作試験場(写真2)だが、これについては後で述べよう。

この町に来てしばらくして、年輩の男たちがかなり日本語の単語を知っており、中には簡単な会話のできる人もいるのに気がついた。聞いてみると、戦時中約3千人の日本兵がサンパトンの寺に宿泊していた名残りである。メー・サリエンを経てビルマに通ずる街道の要衝と考えられたのだろうが、とにかく3千人というのは、この町と同辺の人口を合せた数に匹敵する。平和なサンパトンの町にとって、日本陸軍の駐屯はまさに有史以来の異変であったに違いない。

平和な、と書いたが、私がこの稿を書いている10月中旬は、わけても平和なというべきか、のどかなというべきか、とにかく農閑期の最真中である。草取りは半月程前に終って、あとは来月中旬からの稲刈りを待つだけである。見はるかす水田に人ひとり姿のない時間が多い。たまに見かける人影は例外なく魚釣りする男女である。それかあらぬか、最近はとりわけ寺の行事が多い。今日も試験場の前の寺で催しがあって、善男善女が寄り集まり朝から夜までガヤガヤしていたが、先週はあちらのお寺、またその前はこちらのお寺と人の集まりがある。町のはずれに仮設の映画館と、ボクシングの小屋が組まれているのも、農閑期めあてのドサ廻りの一座であろうか。チェンマイまでバスで

30分たらず、またランプーンまで自転車で40分(バスは通じていない)で、そこには映画館などもあるが、農民にとっては無縁の存在であるらしい。寺を神社に、ボクシング小屋を芝居小屋におきかえてみると、そう遥かな昔でない日本の農村のありふれた秋祭りの風景が想い出される。同じ水田耕作民族として生活のリズムみたいなものはごく似かよっていることを痛感させられる。

しかし、平和で、のどかなサンパトンの風景も一面の現象にしかすぎない。大部分の農民がきわめて貧しい生活に明け暮れていることは、ここもタイの水田農村一般からの例外ではない。サンパトン第一の大地主は水田400rai(約64ha)を所有しているが、5rai(約80a)農家というのも、完全な小作農も多い。人口はだぶついておりながら吸収する産業はもちろくない。私のいる試験場の常雇になるのも、なかなか難しい就職だと聞いている。

### 3 稲作試験場

貧しさの話がでたから、その続きから書く。この試験場には常雇の農夫さんが約60人いるが、古参か特殊な技能(たとえば耕耘機運転とか大工とかの特殊技能)を持つ数人を除くと、日当は7バーツ(約125円)というのが普通である。ちなみに常雇といっても日本とは事情が異なり、賃金は日割りの計算で、1日休めばそれだけ賃金がすくなくなる。私が実験田の手入れや簡単な計算のために雇った中学出の青年に日当10バーツを払っているのは、ここでは破格の給料であるらしい。

仕事はしごく単調でのんびりしている。1日中出穂した稲の横に立って、ホーイ・ホーイとさげんで雀を追っている娘さん。朝から晩まで一列横隊にならんで足で泥田の草をふみこんでいる老若男女もいる。余談だが、ともすると脚気きみの私は、あの仕事は足がしんどいだろうといつも同情にたえない。

職員は場長以下技術者が6名、技術補助者1名、他に若干の事務員がいる。若い技術者は全部バンケン(Bangkhen)の農科大学の卒業生



写真2 稲作試験場の正門付近

で、うち1名はイリノイ大学へ、また1名はコロンボ・プランで日本に留学してきている。彼等の専門は育種2名、作物2名、病理と昆虫がそれぞれ1名である。

この国の稲作試験場が従来は Rice Department の Breeding Division に属して、まったく採種場の役割りしかしていなかったことを、前回の報告(本誌, Vol. 2, No. 4)にも触れたのであるが、昨年来その性格を明らかに変えつつある。ここやピマイ(Pimai) その他二・三の試験場に Technical Division の分室が設けられ、サンパトンには8月から初めて病理や昆虫の研究者が滞在することになったのである。といっても、やはり主体は育種後代の選抜で、交雑も若干は行なわれるが、大部分は中央のバンケーンの試験場やIRRI,あるいはいわゆる Cuttack Hybridとして送付されてきたものについて収量や諸特性の検定が主な仕事となる。

その他に、どういふ実験がおこなわがているかを説明することは簡単ではない。いずれにしても、電気・ガス・水道いずれも不完備なのだから、圃場を使った栽培実験や各種薬剤のふっかけ実験などしか期待できないわけである。それらの実験の目的などを試験場の技術者に直接聞いてみても、あまりはっきりした説明はできないはずである。というのは中央から実験計画書が送られてくるが目的はくわしく書いてない。とにかく、たとえば施肥量を3段階、植付けは何月何日で、品種はこれこれを使えと書いてくる。そして、植付け何日後と何日後の植物体を送付せよである。中央からだけでなく、その他から依頼される場合もだいたい同じようで、その結果がどうなったかはここではわからない。これでは、正直なところ説明させるのが気の毒で、栽培している当事者が「こんな実験らしい」としかいえなくても彼を非難することはできない。

私がタイへやってきて二・三日後に、農林省で二・三の高官と雑談をしていた時、この国の研究成果が遅滞としてあがらないのはなぜだろうかということが話題になった。あるいは予算がないとか、実験施設・器具の類が乏しいとかが理由としてあげられたが、稲作に関する最高の責任の地位にある人が「問題は人である」と言下にいい切ったのが、私には非常に印象深かった。しかし、サンパトンで現場の技術者と3か月以上も毎日を一緒に送り、上のような彼等のおかれた

状態を理解してくると、たしかに「人」に問題があるにしても、その前提として全く中央集権的な研究の system や行政の組織に大きな問題があることがわかる。いま私は「人」すなわち現場の技術者達の弁護者の立場にあることを自覚し出している。

彼等はきわめて親切である。そして私のおこなう簡単な実験に対してもきわめて深い関心を示す。時に半日近くも横に座わられて「それは何か」、「何故そんなことをするのか」などと disturb されることもあるが、彼等の好意と親切の代償としては問題にならない瑕瑾である。そして例外なく美人の奥さんをもって幸福そうである。いずれもチェンマイ近辺の金持のお嬢さんだそう。日本でも「学士様なら……」という時代があったと聞くが、サンパトンともなると、まさに学士様は稀小価値なのであろう。

試験場の水田面積は190rai(約30ha)とかなり広い。途中で丸木橋を渡ったり、木陰で汗をふいて休みながらひと廻りすると小半日かかる。私はまだ2回しか全部を廻っていない。別に用はなくても、また半日がつぶれようとも、この水田廻りを何回もやらない限りは、私はサンパトンの試験場のよそ者であろう。どうやっても、「よそ者」には違いないのであるが、やはり水田を廻り歩けば歩くほど人とも稲とも心が通じるようである。涼しい日をえらんで、これから何回も廻り歩くことを実行するつもりである。

#### 4 モチ稲のこと

サンパトンの試験場の対象はモチ稲で、ウルチ稲は見本程度にしか栽培していない。このタイ北部と東北部のラオス寄りの一帯がもっぱらモチ稲を栽培し、またそれを常食とする地帯であることによる。さらに、これらの地帯は北ベトナム、ラオス、北ビルマをふくめての北緯20°線をはさむ東南アジアのモチ稲栽培地域の一部を形成している。これらと国境を接する中国の南部諸省にも、おそらくこうした地帯が存在するとみられる。

なぜこうした地帯が形成されたかの理由としては、今のところは住民の嗜好上の選択としておくのが穏当であろう。この地域でも、多くの山岳民族はモチ稲を主食としていないのも興味ある問題だと思う。だから、同じ焼畑の陸稲でも、タイ族だとモチ稲を栽培し、山岳民族だと主にウルチ稲を栽培して、モチ稲は酒造用

にわずのかに栽培されるにすぎない。

統計によるとタイ全土の水田面積に対してモチ稲の栽培面積は約40%。これが北部では90%、東北部では70%となり、いかにタイ国の稲作にとってモチ稲が重要な意味を持っているかが理解できよう。モチ米はほとんどが国内消費であるが、毎年日本にも輸出されているし（昨年度が約1万トン、今年はさらに上廻る見込みとのこと）、またラオスに非公式に流れる量がかなりあって、正確な輸出量はなかなか把握できないそうである。

では北タイの住民はウルチ米を全然食べないのかというところでもない。主観的な観察によると富裕な階層ほどウルチ米の消費量が高いようである。一般の農民は例外なく三度三度をモチ米であるが、ちょっと裕福な家では夕食をウルチ米にすることがある。貧乏人は麦ならぬモチ米を食うのである。知人のインテリに「あなたもモチ米が常食か」と聞くと、ちょっといやな顔をされて、「いやウルチ米だ」といわれた事がある。バンコック風の（日本でいうならば東京風の）流行なのか、あるいはあんな農民の食べものというプライドなのか、または副食物の差などにも原因があるのかも知れない。

しかし、あのバラバラのウルチ米よりも、私にはモチ米が好ましい。インテリのおもわくなど無視して、私はモチ米を愛好している。インドでないから、どちらの手を使ってもかまわない。ただ食べすぎると腹にもたれるのが最初のうちは閉口であった。

写真3に示したのがモチ米の炊飯道具で、原形は日本の蒸し器と同様で、七輪の上の土器に水を入れる。上部の容器は木製（チーク製が最上等）で、底部は取



写真3 モチ米の炊飯道具

りはずしができる。この底部は周りにすきまができるようになっている。最近では小さな穴をあけてあるものもあり、そこから蒸気が上ってくるしかけである。どういふ加減か日本の蒸し器や蒸籠（せいろ）にくらべると炊きあがりがかかなり早い。試験場長から一式を寄贈されたので、こわれないように持ち帰って、あらためてわが家で試みてみるつもりである。

（10月18日稿）

## アカ語の現地調査より

桂 満 希 郎

### 1 はじめに

私は京都大学東南アジア研究センターの留学生として、1964年6月20日より1965年10月8日までの約1年4ヶ月タイ国に滞在したが、その間に主として北部タイ国のいろいろな土地を訪れた。というのは、私のタイ国滞在の目的というのが、①標準タイ語の習得、②タイ国北部方言の調査、③北部タイにおけるアカ語の現地調査にあったためである。主なる調査地と滞在期間との概略を示すと次のとおりである。

- ①1964年6月20日～1964年9月15日……バンコク
- ② “ 9月16日～ “ 10月15日……チェンマイ
- ③ “ 10月16日～1965年1月10日……チェンライ
- ④1965年1月10日～ “ 3月9日……バンコク
- ⑤ “ 3月10日～ “ 6月9日……チェンライ

勿論この他にも、メーホンソーン、メーサリエン、ファン等をはじめとしていろいろな土地を訪れたが直接には調査に関係がないので省略する。チェンマイにおいては2人のインフォーマントを使って、北部タイ国の代表的な方言であるチェンマイ方言の調査を行った。しかし、これはそれ自体を目的とするものではなくて、次に行なうアカ語の現地調査のために必要な程度の知識を身につけるために行なったのである。また、バンコク滞在中はチュラロンコーン大学文学部にて講義に出席していたのであるが、この大学については以前に書いたことがあるので、今回はアカ語の現地調査及びアカ族の村における私の生活について書きたいと思う。

### 2 アカ族

タイ国北部には、タイ系の諸民族以外に、いろいろな民族が住んでいてそれぞれ異った言語を話している。これらを大別すると、①チベット・ビルマ系、②モン・クメール系、③タイ系・④カレン系<sup>1)</sup>、⑤メオ・ヤオ系<sup>2)</sup>などである。アカ語というのはこれらのうちの①チベット・ビルマ系に属し、同じ系統に属すると考え

られるものにラフ語(ラフ・ナ語、ラフ・ニ語、ラフ・シ語)、リス語などがある。これらはいずれもタイ国北部の山岳地帯で話されており、たがいに近い関係にあると考えられる。また、これらの諸言語はタイ国内のみならず、ビルマ、ラオス、中国の雲南省においても話されている。しかし、タイ国におけるこれらの言語はまだ科学的に調査されたことがなく、言語学的にみて興味深いものばかりである。私は、当初においては、これら諸言語のおのおのについて少しずつ資料を収集し比較言語学的研究に役立てたいと思ったのであるが、実際に現地におもむいてみて最初の考えが変わり、アカ語一言語をえらんでそれを詳しく調査することにした。

タイ国内におけるアカ族の居住地は極めて限定されている。すなわち、タイ国北端に位地するチェンライ<sup>3)</sup>県のまた最北部にあるメーサーイ、メーチャン、チェンセーンの各地区に居住するのみである。やや南のメースオイ地区にごく少数が居住し、彼らは最近にメーサーイ地区から移住したものだといわれているが、実際に行ってたしかめたことがないのでよくわからない。チェンライの町の北をメー・コック河が流れているが、アカ族がこの河より南に移住したことはまだないと考えてよいだろう。しかし、アカ族の分布全体からみれば、タイ国におけるアカ族はその分布の南限を成すものであろう。

アカ族が最も多く住んでいるのは、ビルマのシャン州(チェン・トゥンを中心とする地域)で、ここには60,000人近くが居住するといわれている。タイ国内においては、ゴードン・ヤング<sup>4)</sup>によれば、約25,000人とされているが、統計にまだ含まれていない部落も存在すると思われるので、実際の数はいくらか上まわる

注 1. カレン語の系統については、まだ一致した意見がないので、ここでは仮に「カレン系」として別個に取りあげておく。

注 2. インド人、中国人もいるが、これらは主として商人として入って来たもので、調査とは関係ないので省略する。

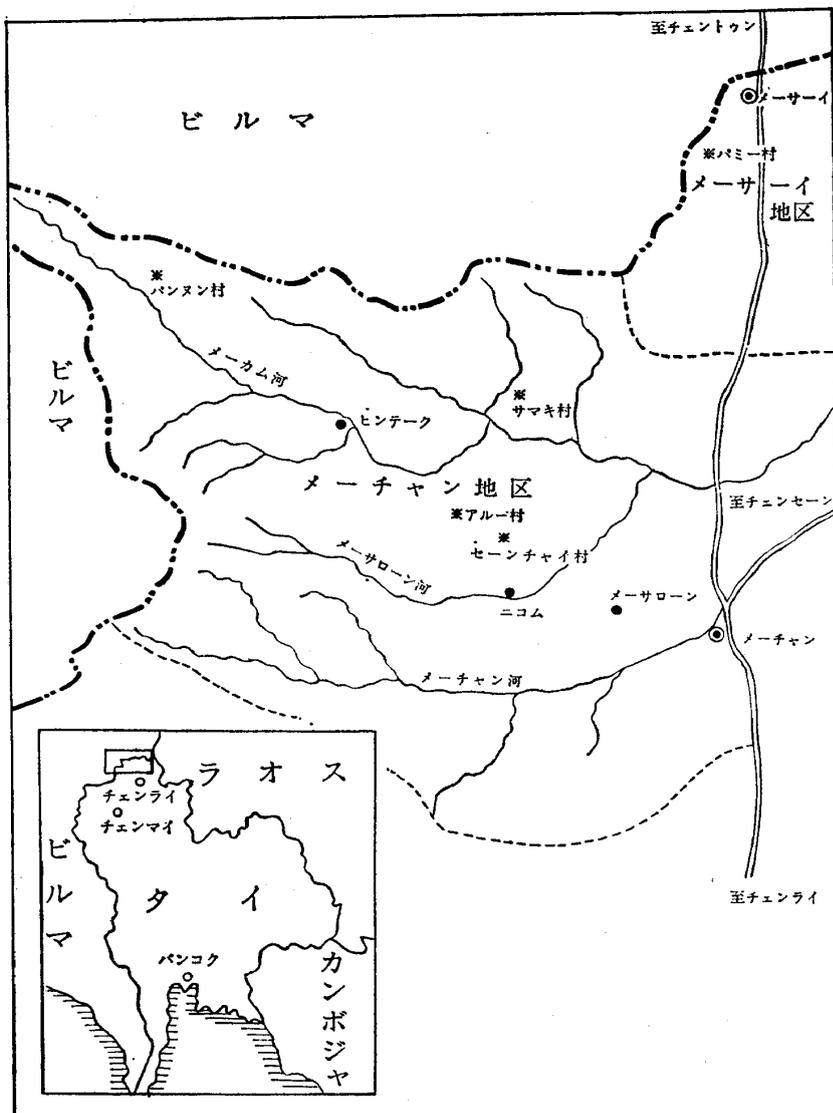
注 3. タイ語の /caŋwát/, /ʔamphəə/, /tambon/ を、それぞれ「県」、「地区」、「村」と訳しておく。別に特別な根拠があるわけではなく、便宜的にこう訳すだけである。

注 4. Gordon Yang: Hill Tribes in Northern Thailand, Bangkok, 1961

であろう。そして、この大多数が、チェンライ—メーサーイを結ぶ道路、メーコック河及びビルマ国境に囲まれる山岳地帯に居住すると考えてまちがいないだろう。この部分には、メー・カム、メー・サローン、メー・チャンという3本の河がいずれも西北より南西に向って走っているが、これらの流れにそった山には、大小をとりまぜてアカ族の部落が点点と存在するのである。くわしくは図を見ていただきたい。黒丸がアカ族の居住地と考えられる地域である。

上に述べたようにその居住地域が限られているため、実際にアカ族の姿を目にするには少なくともメーチャンまで行かねばならない。チェンライの街から北に約30キロ程行ったところにある小さな町である。現在でも、メーサーイ、チェンセン、チェンコーンといった国境に通ずる交通の要所としてかなりにぎわっているが、今ほど国境問題のうるさくなかったころには、タイ、ビルマ、ラオスの各地から集った人達でさぞかしにぎやかだったろうと想像される。この市場などでは、山からおりて来たアカ族がブラブラ歩いている

のによく出合う。他に、ラフ族、リス族、ヤオ族なども多く見かける。私の場合も、あの一種独特の姿をここで初めて目にしたのである。服装について少し述べる。男女ともに基本は紺であるが、それにいろいろな装身具をつけるので、非常に目につきやすいものとなっている。女子は、まず、はばの広いブラジャーとでもいうべき胸あてをし、その上からボタンのない長袖の上着を着る。下はヒダの多いスカートのようなものを、今にも落ちそうな低いところではいている。これがひざまでとどかない位の長さであるが、ひざから下は装飾をほどこしたゲートルのようなものをまいている。大体はだしであるが、中にはタイ人の町から買ったゴムぞおりをはいているものもいる。そして、銀



の腕輪、首輪をはじめとして、ありとあらゆる装飾品をぶらさげている。男子は女子にくらべて非常に地味で、やはり紺の上着に、スソの広くなったズボンをはいている。ただ正装の場合は、これに銀の装身具をつける。男は弁髪であり、女の場合は腰までとどきそうな長髪を高くまきあげて、その上にアカ語で /'ùch'phi/ と呼ばれる頭飾をつけている。この /'ùch'phi/ が、アカ女性の最も顕著なものではないかと思う。木あるいは竹をうすくそいだもので土台を作り、それに布地をはってから、ワラ、木の皮、動物の毛、尻尾、ビルマルピーなどで装飾をほどこし、なかなか美しいものである。これは髪をすく時以外は、仕事をする時も、死んでうめられる時も、取りはずすことはないのである。



アカ族の少女，セーンチャイ村にて

タイ語の話せる者は案外少ない。この辺のタイ語は中央の標準タイ語とはかなり違った北部方言であるが、私の感じでは、非常にシャン語に近いようである。山地民は、自分で作ったゴザ、トウガラシ、時には動物の皮や角などを持って山からおりてきて、それらを売ってえたわずかな金をはたいて、油、塩、ランプ（罐づめの罐を改造したもの）、運動ぐつなどを買って行く。このように平地のタイ人を相手にする場合は、この北部方言を話すわけであるが、これも非常にシャン語風に変形して話しているようである。タイ人の町から最も近いセーンチャイ村（タイ語を教える小学校を有する唯一の村）を別とすれば、タイ国内に住んでいる割には、タイ語の話せる者は少ないのである。これに反して、ほとんどの者がシャン語、ラフ・ナ語を話すことができる。大体にいて、山地民同志の間——例えばアカ族とラフ・シ

族との間——ではラフ・ナ語を話し、平地の人間を相手にする場合にはシャン語を話すことが多いようである。雲南官話の解る者もかなりあるが、メオ族、ヤオ族に比べてその数はずっと少なく、また話せる程度も低いといえる。最近ビルマから国境をこえて入ってきた者で、ビルマ語の話せる者もいるけれど、そのビルマ語というのは非常に荒っぽいもので、あまりこみいった話のできる程度のものではない。ただ、このことは男子についてのみにいえることであって、女性の場合は、ほとんど全員がアカ語しか話せないといってまちがいないだろう。アカ族について本格的な調査を行なうためには、今のところ、シャン語——うまくゆけばタイ語の北部方言——から入って、いずれはアカ語を使っての調査へもっていく必要があるのではないかと思う。

この地域は、タイ、ビルマ、ラオスという3つの国の国境に近いところであり、トランジスターラジオをかけても、タイの放送よりラングーン放送のほうがはっきりとキャッチできる程である。それだけにいろいろな種類の間が混じりあって住んでいる。アカ族はビルマのシャン州からタイ国に入ったとされているが、いつごろタイ国内に住みつくようになったかということについてはいろいろな説があるけれども、せいぜい50年くらい前のことではないかといわれている。いずれにしても、かなり新しい時代に入ってきたものであることにはまちがいないだろう。このビルマ→タイという移動の流れは、小規模にはあるが、現在でもなお続いているといえる。私が村に住んでいる間にも、ごく最近ビルマから来たばかりだという者もいたし、また実



アカ族の村，セーンチャイ村

際に国境を越えてくる連中にも会ったことがある。住みつくために入ってくるだけでなく、売買や見物の目的でメーチャンの町まで入ってくる者もいる。このことは他の山地民についても同様である。山地民以外に、ビルマのシャン族の反乱兵で中央政府と戦って負け落ちてくる者もあり、多い時には200人くらいが同時に国境を越えることもある。彼等の官部はたいてい中国人であるが、兵卒の中には、わずかながら、パラウン、ワ、カチンなどの種族が混じっていることもある。同じシャン族でも兵隊とは別に、経済的な理由でタイ国に来る者があり、彼らは山地民の村と平地のタイ人の町との中間あたりに小さな部落を作っている。他に、国境線近くの Hin Taek という所には国民堂の残兵のキャンプもあり、その他アヘンを扱う中国人などもおり、山の中の田舎ではあるが、ある意味では国際的な所である。ざっとした印象にすぎないが、この辺ではアカ族が最も生活水準が低いのではないかと思う。アカ族の子供が数百パーツでヤオ族の村へ奴隷いとして売りわたされるというようなことが今でも行なわれている。

### 3 アルー村

私は、最初、西田助教授とともに、メーチャンから15キロばかり山に入った所にある Chiengrai Hill Tribe Welfare Settlement (以後、タイ語名よりニコムと呼ぶ)において、アカ語の調査を開始した。このニコムから5キロほど北にあるセーンチャイ村というのが一番近いアカ族の村である。はじめは、いきなり村に住むことはせず、セーンチャイ村からニコムまで毎日インフォーマントに出てきてもらうことにした。ここでうまくタイ語のできるインフォーマントを見つけることができたのは、初期の調査によって大きな助けとなった。その後、西田助教授がターク県のドーイムソー (/dooj musəə/) に移られてから、私だけがアカ語の調査を続けるため、更に奥のアルー (/alù/) という村に住み込むことに決めた。

セーンチャイ村からアルー村まで

約10キロたらず、メーチャンからは30キロたらずということになる。アルー、セーンチャイ共に村長の名前であって、アカ族の村はその村長の名前をもって村の名前とするのが普通である。ただし、セーンチャイというのはタイ語名であって、これは彼がタイ国政府よりタイ国内におけるアカ族のリーダーに指名された際に与えられたものである。彼はタイ語(北部方言)を話すことができるが、これが指名を受けた主な理由になっている。英語のできるタイ人あるいは日本人の場合と似た所があってもおもしろい。アルーの方は、もとはその兄が村長であったところ、この男がアヘンで駄目になったため、村の長老連中の推薦により村長になったのである。セーンチャイが他のアカ族から恐れられているに対し、アルーの方は非常に尊敬されていて、実際にはより大きな信らいを受けているように思われた。以前は数十名の小さな村だったというが、今では300人余りの大きな村になっている。これはアルーに対する信らいによるものだといわれている。

この村に住み込むに当って、まず①住居と②言語(ここではタイ語が通じない)とが問題となった。しかし、運よくも、ビルマから来たシャン族の青年でシャン語、ビルマ語、アカ語、ラフ・ナ語、英語を話すことのできる男を見つけ、彼を助手兼雑役係としてやとることによって、言葉の点は解決した。また住居についても、村に小屋を建てて住もうということに決めたところ、3人のアカ族の手によって、1日でできあがってしまい、この点も別に何ということもなくうまく



アカ族の子供、アルー村にて

いった。ここでこのウ・サムという男と住むことになったわけである。米とブタの皮をかかわしたもの (/khêp mǔu/) とを買いこみ、野さい類は適当に手に入れることにしたが、とにかく不自由することなくうまくやっていった。

この村で生れて育った者の中から、20才くらいの男子をインフォーマントとして選び、聞き取りを行うと同時に、できるだけひろく村人とつきあうことによって、自然な資料を集めるようにつとめた。文字を持たず書き言葉というものがいないので、村が変れば言葉も少し違うといった様子である。例えば、先に述べたセーンチャイ村とこのアルー村とは10キロも離れていないにかかわらず、両者の言葉は少しちがっている。すなわち、セーンチャイ村の /ts-, c-/ はアルー村ではともに /c-/ となり、 /tsh-, ch-/ は /ch-/、 /dz-, j-/ はともに /j-/、 /z-, j-/ はともに /j-/、 /s-, š-/ はともに /s-/ となっている。同じアカ語でも、ビルマ、ラオス、雲南で話されている方言を調べればさらに異なったものが多くあると考えられる。アカ語は、ビルマ語、ラフ語、リス語などとよく似ており、その音節構造は CVC であって、3種のトネームを有する。たとえば、 /jǎ-/ <いる, ある>; /jǎ-/ <習う>; /ajǎ/ <馬鹿者> といったぐあいである。語順も、「主語・目的語・述語」である。例えば /ɣa hó jǎ the/ <私は、御飯を、食べる>。

アカの村での1日は、まず水くみから始まる。それについて米つきである。この2つは普通子供と女性のうけもちである。昼間は男女ともに畑に出て、時期によっては、老人と子供だけしか村に残っていないこともある。焼畑農業で陸稲を作っているが、その他にヒョータン、ワタ、カボチャ、アヘン、トウガラシなどが

主な作物としてあげられる。家畜としては、ブタが主でそれについてニワトリ、犬であるが、村によっては牛を飼っているところもある。農閑期には、女性は布を織ったりワタをつむいだりしているが、男子では狩りに出る者が多い。そして森でとれる生き物ならほとんど何でも食ベると思っただろう。

村では娯楽がとぼしい。商店とか映画とかの類もなく、村の若い者にとっての最大の楽しみは、毎晩おこなわれる寄り集まりであろう。これは雨さえふらなければ必ず行なわれる一種のキャンプファイアのようなものである。村には、そのための場所が作ってあり、おどり、歌、デートなどすべてここで行なわれている。これは適当な結婚の相手を見つける場ともなっている。一般に男女関係は非常に自由で開放的である。血族結婚は案外すくないようである。農閑期が結婚のシーズンになるが、そのころには何日も歩いて結婚の相手を探しに出かける者も多く、村は想像されるほどとぎされたものではないと思われる。

ここでの調査は、自分の事以外にいろいろなつき合いのために相当な時間が必要で、実際に聞き取り調査についやせる時間は1日に5時間程度しか残らない。しかし、言語以外のことがらもだんだんとわかってきて、やはり村に住み込んでの調査のほうがよいと思う。今までの段階では、主として他言語を媒介としての調査であったが、これから先は媒介となる言語の構造にえいきょうされない自然なデータを得るために、monolingual な調査を進めたいと思っている。またこの地域のアカ族の村をできる限りたくさん歩きまわって、おのおのの村で話されている方言の資料をも集めたいと思う。

1965年10月7日、バンコクにて